

## 「アジア青年の家」構想について ～推進にあたっての基本的な考え方～

はじめに

我が国が、国際社会の一員として活躍し、役割を果たそうとする中において、活力に満ち、豊かさを実感できる社会を実現するためには、革新的な考え方の下で、新たな技術、製品、サービスを生み出す必要がある。そのためには、新たな価値を生み出し、社会的に大きな変化を起こすこと、すなわちイノベーションを推進することが重要となる。このイノベーションを推進する基盤は「人」であり、特に、将来を見据えれば、次世代を担う若者に、イノベーションを起こす原動力となる、イノベティブマインドを如何に育むことができるかがカギとなる。

そこで、次世代を担う日本の青年とアジアの青年が交流することとなっている「アジア青年の家」構想について、上記の観点から、期待をこめて提言する。

この構想は、日本と他のアジア諸国との地理的・文化的な接点であり、万国津梁の地である沖縄において、異なる文化、生活習慣を持つ同年代の若者同士が共同で生活をしながら、様々な活動を行うものである。沖縄では、自立的経済の構築が喫緊の課題といわれ、自ら進んで行動する「人」の育成もその一つの柱とされている。

この構想を通じて、沖縄、日本ひいてはアジアの将来を担う若者のイノベティブマインドが育まれることを期待している。

### 1. 構想の基本的視点

#### (1) 国際的な感覚を持ち、多様性を受け入れる人材を育てるために

##### ① 共生の精神が必要

将来を担う若者は、国際的な感覚を持ち、多様性を受け入れる姿勢をもつことが不可欠である。これからの社会では、広く世界を見て、その中で自分が何をできるかを自覚することが大切であるが、そのためには、異文化に接し、世界のあらゆるものを受け入れる姿勢をもつことが必要である。また、異文化を体験し理解を深めることは、人間的な幅を形成し、いたわりの心を持つことにもつながる。

この点を踏まえれば、まずは、異文化に多く触れる機会を提供することで、多様性を受け入れる素地を作る必要がある。そしてその上で、他の文化と共通

の部分を見出し、お互いに共通する目的や利益を考えていく必要がある。「多様性を受け入れる」といえるためには、多様なものがあることを知るだけでは十分ではなく、その多様性を踏まえ、広い視野の下で自分はどうすればよいかを考えることが必要だからである。文化や国に違いを超えた「人」としての絆を深め理解する精神、すなわち、共生の精神を育むことが求められる。

## ②共に生活し、議論する

では、こうした共生の精神を育むためにはどうしたらよいのだろうか。

異文化を知り、少しでも深く理解するためには、文化、慣習、宗教の異なる若者同士が日常的に交流することが何よりの近道である。そこで、こうした若者数人でグループを組み、日常生活からものづくりやスポーツなどの共同作業を行うことがよいと考える。こうすることで、文化や国を超えた「人」としての絆を深めることもできる。

そして、こうした活動の中で、活発に議論する機会を設けることが必要である。お互いの考えをさらけ出すことで、より深い理解が生まれるからである。意見交換する中で、お互いの共通点を見出し、共通の目的や利益を考えることが期待される。

## (2) イノベティブマインドを育むために

イノベティブマインドを育むためには、刺激を与えることが有益である。若者は、様々なロールモデルに触れて刺激を受けることにより、自分のイノベティブマインドの萌芽に気付くのである。そこで、この構想においては、ノーベル賞受賞者を始めとした優れた科学者や、伝統技術・芸能を極めた「名人」等、多くの「飛びぬけた人」「すごい人」、また、これらの人が生み出した素晴らしいものに触れ、刺激を受ける機会を作るべきである。

そして、刺激を受けた若者に、勇気を与えることが必要である。刺激に触発された若者は、自分が何をしたいのか考え、悩むであろう。そこで、精一杯考え抜く若者を、認め、元気づけることで、更に考えることに対するモチベーションを与えるのである。この構想においても、こうした環境を与え、若者が、自分の可能性について積極的に考え、固定観念を打破するユニークな発想を生み出す土壌を作るべきだと考える。

## (3) どのようなテーマがふさわしいか

では、こうした活動には、どのようなテーマがふさわしいのだろうか。参加

する若者が異なるバックグラウンドを有している中では、共通する課題を見つけ、それをテーマとすることが必要である。しかし、いくら共通する課題であっても、単なる仲間内の議論に終始しては発展性が乏しい。活動を通じて、共生・協働のもとでアジア地域の今後の諸課題に取り組み、地球と共に生きる力を養われなければならない。そこで、こうした力が養えるような世界的規模の問題、例えば、環境や貧困削減、労働問題等といったテーマがふさわしいと考える。

特に、環境に関する課題は、問題意識も共有し易く、身近な視点から解決策を考え易いテーマだと考えられる。環境を護りつつ「持続可能な発展」を実現することのできる科学技術のあり方や、環境を護っていくために自分達が行動すべきことについて考えることは、今後の世界にとって大いに重要なことである。こうした趣旨から、「持続可能な発展」をテーマとすることを提案する。

そして、テーマに基づいて、様々な活動を行うとともに、成果を自らまとめ上げることが重要である。この成果を対外的に発信することにより、社会に新たな広がりを生み出すこととなる。

## 2. 構想は、アジアに大きな効果をもたらす

この構想は、「人」の育成を第一の目的とするものだが、この点にとどまらず、日本を含めたアジアに大きな効果をもたらす。

まず、この構想を通じて、参加者が自らネットワークを形成することで、アジア全体に一体感を育むことが期待できる。参加者の間に同窓会的なネットワークを構築することができれば、参加者相互が将来にわたって深い絆で結ばれることとなる。このような絆で結ばれた若者が、アジア各国で活躍することは、アジア全体の発展にとってこの上ない財産となるに違いない。

また、アジア各国においても大きな効果がある。構想を通じて、参加者であるアジアの若者と日本の若者との間に友情が芽生え、お互いの国を行き来して活躍するようになれば、各国にとっては大きなメリットとなる。そもそも、日本にとっては、この構想を推進すること自体が、他のアジア諸国と共生していく日本の姿勢を示すこととなり、アジアの一員としての存在価値を高めることにつながる。

すなわち、この構想を通じて、アジア全体の一体感が育まれることで、アジアの将来にとっても、日本の将来にとっても、大きな効果が生まれるのである。

### 3. 沖縄こそ構想の出発点

そして、この構想は、沖縄で実施することにより、とても有意義なものとなる。沖縄の置かれた位置や特性が、この構想にもたらす効果は大きく、また一方で、この構想が沖縄にもたらす効果も大きい。沖縄こそ、この構想の出発点だといえる。

#### (1) 沖縄が構想にもたらすもの

##### ① アジアのなかの日本の接点としての沖縄

沖縄は、地理的な位置のみではなく、歴史的、文化的にも他のアジア諸国と本土との接点にある。古くから、中国との貿易が栄えており、中国から伝えられた文化は今でも数多く残されている。また、亜熱帯の植物と美しい海に囲まれた雰囲気は、東南アジアの風土を色濃く感じさせる。沖縄こそ、あらゆる意味において、「アジアの円（縁）」と「日本の円（縁）」の交差するところだといえる。

さらに、こうした地の利と相まって、沖縄には、楽しく優しく人に接する温かさが溢れている。そこで、全ての参加者が親近感を感じながら、プログラムに取り組めるのである。沖縄が古くから万国津梁の地とされている所以である。

##### ② 構想にふさわしい特性

そして、沖縄には、この構想で取り上げるにふさわしい特性がある。

まず、豊かな自然環境がある。世界でも有数の美しさといわれる珊瑚礁、身近に広がる亜熱帯の植物など、自然環境の大切さを肌で感じ、環境問題の重要性を認識することのできる恵まれた特性は、アジアでも類を見ないと思われる。環境の豊かさを実感するだけでなく、珊瑚の白化現象の様に、美しい自然環境が失われていく現状に触れる機会もある。年々脅威となる台風も、地球温暖化の影響を受けているとも言われており、環境問題を考えるよい素材である。

そして、平和の尊さを考える機会を提供できる。沖縄は厳しい戦争体験をもっており、過去の戦跡等に触れることにより、平和の構築の大切さを身近で感じ考えることができる。

一方で、日本の若者音楽をリードするミュージシャンや世界で活躍するスポーツ選手を輩出するなど、最先端に行く沖縄の姿がある。

## (2) 構想が沖縄にもたらすもの

まず、この構想が、沖縄が目指す科学技術振興、国際交流の方向性に合致している。この構想の成果を積み重ね、沖縄を、日本とアジアのゲートウェイとして位置づけることができれば、国際交流において自ずと確固たる地位を確立でき、また、沖縄科学技術大学院大学の取組みと連携することにより、科学技術振興の拠点としての地位も確立される。

そして、アジアの若者により、沖縄の魅力が再発見され、沖縄のファンが拡大する効果がある。沖縄のファンとなった参加者が、母国で沖縄のメッセンジャーとなることで、ファンが更に拡大することも期待できる。また、参加者が沖縄科学技術大学院大学の将来の研究者として戻ってくることとなれば、アジア各国との友情の上に立った科学技術も推進される。

## 4. 構想を効果的に推進するにあたっての重要なポイント

最後に、構想を効果的に推進するために具体的に考慮すべきポイントを述べる。

### (1) 人選のあり方

参加者の人選はとても重要である。この構想に参加することで、大きく成長できる若者を選ばなければならない。

この点、イノベーションを起こすには、自分で課題を探し出し、その課題を解決するために努力する姿勢が必要である。単に「与えられたことをこなす」こととは全く逆の発想である。従って、変革の意欲があり、前向きな若者がこの構想にはふさわしい。この構想のテーマに強い関心があることは当然である。

そして、当面は、ミドルティーン（中学生後半から高校生）を対象として実施すべきである。早い時期に、共生の精神を育て、イノベティブマインドを育むことで、将来の大いなる成長の可能性が拓けると考えられるからである。規模については、当面は、アジア50人、沖縄50人、沖縄以外の日本50人の計150人程度が適当だと考える。

具体的な人選の方法については、課題を提示の上で公募する方法や、国内では、例えばスーパーサイエンスハイスクール等の意欲的な取組みに着目することが考えられる。人選に十分な時間的余裕をもつために、募集はなるべく早い時期から行うことが望ましい。

## (2) 適切なコミュニケーションをとるための方策

この構想は、異なる言語、慣習、宗教をもつ若者同士の交流であるから、若者同士が適切なコミュニケーションを取れるよう、最大限配慮する必要がある。

### ① 言語

異なる言語で生活する若者同士の交流である以上、英語を基本言語として実施することが適当である。この点、参加者が中高生であれば、語学力が必ずしも十分でない場合もあるが、語学力に高いハードルを課すと、その分、語学力以外の面で本来望むべきハードルが低くなり、この構想に適した若者を選抜できなくなるおそれがある。そこで、語学力については、日常生活や簡単なコミュニケーションをするために必要な程度のものは求めつつも、専門的な分野については通訳をつけるなどの対応をすることが望ましいと考える。流暢に話せなくとも、自分の考えを伝えようとする意思が大切である。また、他の参加青年と比べて語学力がないことを痛感することにより、今後、これを契機として語学力に磨きをかけることも期待できる。

### ② チューター (facilitator、peer)

前述の通り、この構想は、文化、慣習、宗教の異なる若者でグループを組むことにより実施することが望ましい。しかし、参加者が中高生の場合、コミュニケーションを図るために多くの困難と時間を要する。そこで、参加者とは別に、参加各国から大学生世代のチューター (facilitator、peer) となる人を、各グループに配置することが適当である。

このチューターは、世話役として参加者の日々の活動の手助けをするほか、構想の具体的計画の段階から参画し、運営に関わることも考えられる。各グループがチューターのもとで自主的に活動することで、「若者の若者による若者のためのプログラム」となることが期待される。なお、チューターの選定に当たっては、国際的な取組みをしている国内外の大学とタイアップすることも有効だと考えられる。

## (3) 効果的な情報発信

構想を実施する一方で、積極的に情報発信することも重要な要素である。この構想に直接参加できる若者は、限られている。しかし、実施の状況をリアルタイムに発信することで、全国の向上心溢れる若者に、この構想の内容に少しでも触れてもらうことができる。また、この構想が広く知られることになれば、

各地において、第二、第三の同様の取組みが生み出され、より多くの若者にチャンスが巡ってくることになる。積極的に情報発信することで、この構想の成果を享受する範囲が広がるのである。対外的にも、アジアの共生を重視する日本の姿勢を発信する又とないチャンスである。

そこで、この構想では、戦略的な情報発信をするべきだと考える。報道機関等による取材は勿論のこと、これらと共同してインパクトのある企画を実現して発信すること、参加者の日々の活動を複数の言語のブログで発信することなどを、効果的に組み合わせることを検討すべきである。

#### (4) その他の重要な点

その他、特に強調すべきこととして、参加者の身体面、心理面での健康を維持するためにあらゆる面で細かく配慮する必要がある。沖縄の生活を体験させる中でも、食事等において、各国の慣習や宗教に配慮することは必須であり、病気、怪我などの対応もしっかりと決めておく必要があるだろう。

また、沖縄の気候的な特性として、台風に遭遇する可能性が非常に高いこともある。台風に遭遇した場合の対処方針の確立や、プログラムの柔軟性を確保しておくことも必要と思われる。

おわりに

以上、「アジア青年の家」構想について提言をしてきた。この構想の対象は、中学生以上という比較的若い年齢層を対象として、長い目で「人」を育てようとしている点で、画期的な取組みである。

冒頭に述べた通り、我が国では、イノベティブマインドをもった「人」を育てていくことが求められているが、この構想は、その一つの契機に過ぎない。この構想が成果をあげることで、若者が国内外で学びたい時に学べる環境が整備されると共に、イノベティブマインド溢れる社会の素晴らしさが全国的に共有されることを期待している。

平成19年8月29日

有馬 朗人

池上 清子

稲嶺 恵一

黒川 清

渋谷 英章

モンテ・カセム

## 「アジア青年の家」実施イメージ

テーマ: 持続可能な発展 期間: 夏休み期間内の約1ヶ月 参加者: 中高生150名(アジア50名、沖縄50名、沖縄以外の日本50名)

内容	趣旨	プログラム例
開会式	参加に当たっての心構えをもつ。	主賓挨拶、基調講演、ウエルカムパーティー
第1ステージ (概況を学ぶ)	イントロダクションの期間。 沖縄の概況と環境問題の基礎について学ぶ。参加者間の交流を促進することも目的とする。	沖縄の概況及び環境問題に関する講義、県内見学、環境について日頃考えていることについて意見交換
第2ステージ (自然環境を体験する)	離島における自然環境体験の期間。 珊瑚礁見学など、各種体験プログラムを通じ、自然環境の素晴らしさ、現状を身をもって感じ、関連講義を受けることにより環境に関する問題意識を確立する。また、沖縄の離島の空気を肌で感じると共に、広大な施設を利用してスポーツ等による交流を深める。	シュノーケリング・シーカヤック等による自然観察、漂着ごみ視察、観光客と一緒にビーチクリーン、体験学習に関連した講義(研究所や地元の取り組み等)、キャンプ、スポーツ交流、参加国の紹介を通じた相互理解の促進
第3ステージ (環境保護策を研究する)	本島で環境問題の解決策を研究する期間。 第2ステージで得た問題意識を踏まえ、持続可能な発展とは何か、そのために何が必要かを研究する。環境と科学技術の関係についても学習する。また、沖縄の伝統文化、芸能にも親しむ。	大学院大学、琉大、高専等の視察、科学者との意見交換、各グループの興味に応じた選択式プログラムの実施、伝統工芸体験、エイサー祭り参加
ホームステイ	沖縄の直の生活に触れる期間。 県外の青年は沖縄について学び、県内の青年はホームステイにおける県外の青年の様子を見ることで、多様な文化、慣習を肌で感じる。	生活体験、農業・漁業等の体験
第4ステージ (成果をまとめる)	プログラムの成果をまとめる期間。 これまで学習したことを踏まえ、①環境問題の現状認識及び自分たちで今後行うこと、②沖縄発のメッセージをまとめる。グループでのディスカッションを中心として行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループによるまとめの議論及び成果発表</li> <li>・各グループの成果発表を踏まえ、参加者全体で環境に関する行動計画を策定</li> <li>・沖縄発のメッセージ作成</li> <li>・参加者によるプログラムの評価及び自己評価(自分がどう変わったか)</li> </ul>
閉会式	環境に関する行動計画、沖縄発のメッセージを発表する。	行動計画発表、沖縄発のメッセージ、修了証授与、講評、記念講演、フェアウエルパーティー

- \* 各ステージは平日1週間程度(月曜～金曜)、ホームステイは土日を含む2泊3日を予定。
- \* 活動は、大学生世代のチューターの下で構成される10～15名のグループを単位として行う。
- \* 閉会式だけでなく、第2ステージ、第3ステージにもグループ発表の機会を設ける。
- \* 各ステージでは、プログラムを実施しつつ、適宜、現地の方達との交流を行う。